The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	戦後日本の児童文学としてのGreen Mansions 翻訳の研究 : 香山滋の『魔女の森」について
Author(s)	歳岡, 冴香
Citation	大阪大学言語文化学. 2013, 22, p. 55-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

戦後日本の児童文学としての *Green Mansions* 翻訳の研究

—香山滋の『魔女の森』について—*

歳岡　冴香**

キーワード：戦後児童文学、翻訳、香山滋

Any translation cannot be free from its socio-cultural contexts. One of the chief purposes of translation studies is to investigate how particular social, cultural, and political contexts are related to changes made in the translation from its original.

The present paper discusses Shigeru Kayama's *Majo-no-Mori* (1954), a Japanese translation of W.H. Hudson's *Green Mansions*. It reflects the social and cultural contexts of the post-war Japan, including the roles expected of translations and of children's literature. The original novel is set in South America, and shares some of the typical features of its contemporary travel writings analyzed in Pratt (1992). It is written from the perspective of Abel, who describes the natives in a derogatory tone and declares his ownership of their land. However, the interaction with the natives in what Pratt calls the 'contact zone' destabilizes his perception that he is morally superior to the natives.

While the original novel thus suggests ambivalence in Abel's attitude and feelings, Kayama's translation transformed it into a simplistic moral story for children. Abel is changed from a 'nervous olive-skinned Hispano-American' into a righteous American boy who, after the events of the story, continues to travel to abolish the native superstitions that could cause tragedies like the death of his beloved native girl Rima. In this modification, we could discern a political role of translations and children's books in the post-war Japan, which was to educate their readers to follow American lead in rebuilding and democratizing the Japanese society.

Kayama's original works would also support the view that his modifications of *Green Mansions* were motivated by social and political expectations mentioned above, rather than by Kayama's personal interpretation or intention. Kayama, as a writer, was influenced by *Green Mansions*, and his original work *Mitsurin-ni-Saku-Hana* shows this influence clearly.

---

* A Study on Translation of *Green Mansions* as Post-War Children's Literature in Japan: On Shigeru Kayama's *Majo-no-Mori* (TOSHIOKA Saeka)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

In the work, however, Kayama proposes an alternative ending for the conflict between natives and outsiders in the 'contact zone'. At the end of the story, the natives and the outsiders eventually build a mutual understanding. This seems to show that Kayama would have preferred peaceful negotiation as a solution for the conflict in the 'contact zone', and that the modifications he introduced in *Majo-no-Mori* were influenced strongly by what was socially expected of translations and children's literature in the post-war Japan.

1 はじめに

翻訳という行為を、その社会的文化的背景から切り離して考えることはできない（Lefevere and Bassnett 1990: 11）。Baker（2006）は、商業的な動機にせよ政治的な動機にせよ、翻訳者はある社会にどのような思想を流布させるかを左右する立場にあり、翻訳する書籍の選択に加え、実際の翻訳過程で、省略や付加によって、原文に含意された政治的主張や思想を強調したり和らげたりする場合があることを指摘する（38; 114）。ただし、ここでの翻訳者とは、翻訳者個人のみを指すのではなく、出版社や政治的圧力など、翻訳に影響を与えうる様々な要因を含んだ磁場と考えるのが適切だろう。なぜなら、ある本の翻訳出版の是非や翻訳文の調整は、翻訳者の一存で決定されるものではないからだ。また、Toury（1995）は、翻訳が、原作の書かれた文化的社会的背景よりもむしろ、目標言語文化の文化的社会的背景の影響を強く受けることを指摘する。すなわち、翻訳の対象となる書籍の選別や本文の改変は、その翻訳が行われる場所と時代における社会的・政治的・文化的な状況を反映したものと考えられる。Bassnett（2002）は、翻訳過程に影響を及ぼすこれらの要因を明らかにすることこそが、翻訳研究の主眼であるとすら述べる（43）。

本論文では、William Henry Hudson の *Green Mansions* の邦訳の一つで、1954 年に出版された香山滋の『魔女の森』にみられる改変について論じる。*Green Mansions* は南米を舞台とする探検譚であり、ヴェネズエラ人の青年 Abel が、イギリス人の「私」に語る回想の形をとっている。Abel は革命に敗れた後、長年の夢だった奥地への探訪に出かけ、先住民および彼らが魔物の娘として恐れる少女 Rima に出会う。Abel は Rima と恋に落ちるが、彼女は村人に殺され、Abel は報復として村人たちを皆殺しにする。復讐を終えた Abel は罪の意識に苛まれる日々を送るが、やがて Rima の遺灰とともに長い苦難の道のりを経て、文明社会へと帰還する。原作者の Hudson は 1841 年アルゼンチンに生まれ、長じて渡英の後、小説家、鳥類学者として文筆活動を行った人物であり、他にも *Purple Land*、*Far Away and Long Ago* など、南米を舞台とした作品を遺して

いる（Tomalin 1984）。下の表1に示すとおり *Green Mansions* には13の邦訳があり、この物語が常に日本の読者を魅了し続けてきたことを示唆している。

Puurtinen（1994）は特に児童書の翻訳において、原作の改変はそれが目標言語文化に受容されるために必須のものだと述べている（84）。後に述べるように『魔女の森』は大きな改変が施された子供向けの翻訳であり、その改変には、戦後日本社会の文化的、社会的な様相が反映されていると考えられる。さらに、後に述べるように *Green Mansions* は、翻訳を手掛けた香山滋自身の創作活動にも影響を与えたようだ。香山滋は戦後、雑誌掲載の探偵小説、少年少女向けの冒険小説の書き手として活躍した人物であり、後には『怪獣ゴジラ』の脚本も手がけている（瀬名 1997）。香山滋は戦後日本の大衆文化・児童文学を担った人物の一人といえるだろう。

表 1. *Green Mansions* 邦訳の変遷 [1]

出版年	翻訳者	タイトル	出版社など
1937年	村山勇三	緑の館－熱帯林ロマンス	岩波文庫
1954年	香山滋	魔女の森	偕成社（『世界名作全集』）
1959年	青木枝朗	緑の館－熱帯林のロマンス	若草文庫
〃	永井比奈子	緑の館－熱帯林のロマンス	秋元書房
〃	蕗石忠枝	緑の館	新潮社
〃	守屋一郎	緑の館	角川書店
1960年	野田開作	緑の館	偕成社（『少女世界名作全集』）
1967年	西川清子	みどりの館	集英社（コバルト・ブックス）
1970年	上田健次郎	緑の館	小学館（『少年少女世界の文学』）
1972年	柏倉俊三	緑の館	岩波文庫
1975年	前田三恵子	みどりの館	集英社（『ジュニア版世界の文学』）
1975年	榎林哲	緑の館	岩崎書店（『世界の名作文学』）
1997年	河野一郎	緑の館	筑摩書房

2　戦後の翻訳と児童文学をめぐる状況

まず、ここでは第二次世界大戦直後の日本における翻訳と児童文学をめぐる状況をみていく。翻訳出版の興隆は、戦後日本の出版状況を特徴付ける現象といえる。『日本読書新聞』は、翻訳書が「海外文化への大きな窓」（1947年10月1日）となるという期待を表している。また1946年度の『出版年鑑』は、読者がそこに「精神的な糧」を見

[1] 村山勇三による最初の *Green Mansions* の邦訳は、原作を忠実に翻訳したものである。1930年代には *Naturalist in La Plata* のように南米を舞台とする Hudson の作品の最初の邦訳が出版されており、また文学雑誌『動物文学』における「博物紀行文集」や「アマゾンの博物学者」という特集にも、Hudson の作品の邦訳が掲載されている。村山訳も *Green Mansions* を児童書としてではなく、南米を舞台とした Hudson の作品の一つとして日本に紹介するものであったと考えられる。1959年には4つの翻訳が出版されているが、これは、同年に Mel Ferrer 監督により *Green Mansions* が映画化され、それが日本でも公開されたことの影響を受けたものと考えられる。

出しているといい、「翻訳物の出版が今後も今後も活潑に續くであろう」と予測する (2)。しかし、当時の日本における翻訳出版は、米国の占領政策の一部であり、米国主導の日本の民主化を促進する手段でもあった。宮田 (1999) は、翻訳権の制度も国内における翻訳の規制に利用されたとも述べている (21)。『GHQ 日本占領史』には、翻訳出版の目的を占領目的の推進とする米国の方針から、日本国内での自由な翻訳出版は規制され、米国が選定した外国書籍が 1948 年から 1950 年にかけて、13 回の入札により提供されたことが記されている (169-170)。入札された外国書籍は「日本の民主化と再建に貢献すると目される世界各国の図書」であり、「日本人の責任と義務を自覚させ、日本占領の目的を推進するのに役立つもの」とされている (『日本読書新聞』1947 年 10 月 8 日; 1948 年 5 月 26 日)。これらの書籍のなかには、産業、経済、科学の実用書に加え、児童書も含まれていた。たとえば M. K. Rawling の *The Yearling* もそのような児童書の一冊だが、それが少年の自立と成長の物語である点が強調されるなど、日本の復興を担うべき子供たちへの教育的意図が強く意識されていた (歳岡 2010)。このように戦後の翻訳出版は、米国の占領下における日本の民主化と復興を目指す政策の一環であり、翻訳児童書もその一部としての教育的役割を担っていたのである。

また大藤幹夫は、大戦後日本の児童雑誌の傾向を調査した結果、終戦後から 1949 年ごろまでは子供への楽天的な期待と科学力の必要性を描く児童雑誌が流行したが、その後、より「おもしろくてためになる」ことを重視する、通俗的な娯楽雑誌が増えたと指摘している (大藤 1977 [1975]: 286)。大藤はさらに、それらの娯楽的な小説においては、読者である少年少女の模範的なモデルがアメリカ人の登場人物に求められる傾向があったことを指摘している (ibid.)。この傾向は、米国の主導のもとで復興を目指すことを目的に児童を教え導くという、さきに触れた大戦直後の翻訳児童書が担っていた教育的役割を引き継ぐものといえるだろう。

『魔女の森』を手掛けた香山滋は、そのような通俗娯楽雑誌で活躍していた作家の一人だ。1953 年 12 月に発行された児童向け雑誌に発表された小説のタイトルを調査した研究によれば、「王」や「魔」、あるいは「幻」や「影」などの「ふたしかなものを表現する文字」、「城」「塔」「谷」「密林」という「古色や原始性を連想させる字」が多く見られるという (寒河 2007 [1953]: 185)。『魔女の森』という題名も同様に、そのような雑誌小説での流行を反映したものと想像される。

3 『魔女の森』における改変

Pratt は *Imperial Eyes* (1992) において、18 世紀から 20 世紀初頭に著された南米やアフリカを舞台とする旅行記のケーススタディーを行い、これらの旅行記が、ヨーロッ

パ外の世界を西洋人探険家の視点を通して西洋の読者に提示することにより、帝国主義の推進を正当化していたと主張する（Pratt 1992: 5）。*Green Mansions* は正確には旅行記ではないが、語り手 Abel の視点で奥地の自然や先住民を描写している点において、Pratt（1992）が分析した同時代の旅行記と類似の構造をもっている。そして、先住民に相対する白人として自己を規定する Abel の眼差しには、西洋がヨーロッパの外の世界に注ぐ眼差しが投影されているといえる。また、Pratt（1992）が特に注目するのは、西洋人と先住民が接触する 'contact zone' である（6）。彼女は、その両者が接触し関係する際にも、その関係は常に不均衡であるため抑圧や衝突が起こるという（ibid.）。ただし彼女は、不均衡な力関係をはらんだこの 'contact zone' で起こっているのは、両者の分断ではなく、両者が相互に影響を及ぼしあう関係であると強調している（7）。

Green Mansions のような冒険小説や、旅行記の翻訳には、翻訳される国における政治的な意図が投影されることが多々あることはこれまでにも指摘されている（Venuti 1998; Fitzpatrick 2000）。本節では、Pratt（1992）の研究を踏まえ、米国の占領下にあった戦後の日本で出版された『魔女の森』において、*Green Mansions* がどのように改変されたのかを分析する。*Green Mansions* では、'contact zone' における、Abel と先住民との接触が描かれているが、以下、*Green Mansions* の語り手である Abel の人物像と、Abel による先住民の殺戮の場面にみられる改変に着目し、その改変の理由を考察する。

3. 1　Abel の人物像

さきに述べたように、米国の占領下で戦後の復興を目指す日本において、翻訳児童文学は教育的役割、すなわちその占領を円滑に進めるという使命を負っていた。『魔女の森』にみられる改変にも、この物語が戦後の翻訳児童文学として、そのような役割を担っていたことが表れている。

まず、主人公 Abel の人物像に着目すると、原作ではヴェネズエラ人の青年であった Abel が、『魔女の森』ではアメリカ人の少年へと変えられている。さらに、原作において物語の冒頭で「私」が出会う青年 Abel は、'the *nervous* olive-skinned Hispano-American'（15）で、明朗快活な外見の奥に、痛ましい過去の記憶を胸に秘めていることが「私」の目にも明らかな人物とされている（イタリックは筆者）。その傷は南米奥地での体験が Abel にもたらしたものだ。しかし、『魔女の森』の冒頭で紹介される主人公 Abel は次のよう描写されている。「年のころは十五、六才、肩はばのひろい、骨ぐみのがっちりした、いかにも蛮地探検家らしい、ヴェネズエラ生れのアメリカ少年である。顔は日にやけて、まっくろだが、ゆたかな栗色の髪と、青空のように澄んだ目が、かがやくばかり美しかった」（12）。ここでは Abel の人物像が、過去の経験から心に傷を負っ

た青年から、たくましい冒険家の少年へと改変されていることがわかる。この改変は、一つには主人公の年齢を読者層の少年少女に近づけるためであっただろうが、少年少女の目指すべきモデルとしてふさわしい、たくましいアメリカ人主人公を、物語の中で提示する意図も働いていたと考えられる。Abelの人物像にみられるこのような改変は、『魔女の森』が戦後の翻訳児童文学として、アメリカをモデルとする教育的役割を担っていたことを示唆するものだ。

また、Abelの人物像のより詳細な部分にも改変が加えられている。原作では「革命派」に属していたAbelが、『魔女の森』においては、「大統領派」の政治家の息子とされている。このAbelは、父が革命派の憲兵に狙撃されると、「りっぱに自分の主義にたおれた父に、心からの黙祷をささげ」(14)、父の親友であった中尉と共にオリノコ河上流へ逃げ延びる。Abelがさらなる探検に旅立つ決心を中尉に告げると、中尉は「勇敢な少年探検家Abel君」のために乾杯し(17)、「ぼくたちの信頼する大統領派のために、あなたが、りっぱなおはたらきをなさいますよう」にと(17)、快く彼を送り出すのである。このように、『魔女の森』のAbelは、大統領派の立派な政治家の息子で、正義感と使命感を背負った少年とされている。これもアメリカ人少年のAbelを、国と正義のために尽くす人物、すなわち、読者の少年少女のモデルとしてふさわしい主人公にするための改変であろう。

さらに、原作のAbelは、村人を力の面でも芸術的感性でも劣った、無表情で不機嫌そうな存在として語る。Pratt (1992) は、旅行記にみられる先住民の描写の特徴として、彼らが没個性的な集団として描かれる傾向があることを指摘している(63)。そして、そのような先住民の描写は、西洋人による風景描写と相俟って、先住民の土地認識を否定し、西洋の近代国家における領地と所有権の制度を強要するものであると述べている(64)。すなわち、そのような旅行記における先住民描写は、西洋人がその土地を支配し、植民地化を推し進めることを正当化する手段なのだ。*Green Mansions* における先住民の描写にも、先住民を無個性の一塊の集団として描く傾向がみられる。たとえばAbelは、白人には貧富の差があるのと対照的に、先住民はみな同様であると述べる：[T]he Indians are not like white men: they have no gold; they are not rich and poor; all are alike. One roof covers them from the rain and sun.' (229) また、音楽を奏でるAbelを見守る先住民たちは、'a set of hollow bronze statues' (37) と、無表情な銅像の群れに喩えられている。さらに、Abelの滞在する村の村長Runiの描写においても、'a taciturn, finely formed, and somewhat dignified savage, who was either of a sullen disposition or not well pleased at the intrusion of a white man' (28-29) と、白人の侵入を喜ばない不機嫌な「野蛮人」の様子が強調されている。繰り返し描かれるこのような先住民観こそが、物語の

後半、Abel が Rima を殺された怒りと悲しみに駆られたとき、先住民を一様な悪として暴力的な制裁を加えることを正当化する根拠となると考えられる。

しかし、このように先住民を下等な集団として均質化する原作の記述は、『魔女の森』では削除されている。翻訳の Abel は、逆に、土地の先住民への尊敬の意を積極的に表す。村長の Runi に、彼はこう述べている。「ぼくはギアナの人々を心から愛しています。ぼくは、ヴェネズエラを出発して、はるばる、ここへくるまでのあいだに、どれほどたくさんのギアナの酋長や家長となかよくしてきたか知れません。ぼくは、ギアナの人々が、ほんとうにりっぱであると信じてうたがいません」(37)、そして「ぼくは、あなたたちを心から尊敬しているのです」(38)。これらの言葉は原作には無く、翻訳で加えられたものである。

このように Abel の言葉から先住民を見下す発言が削除されたのは、Abel を民主的で友好的な少年として描くための改変であったと考えられる。改変の結果、『魔女の森』でのアメリカ人主人公 Abel は、先住民を尊重し友好的な関係を築こうとする人物として描かれた。この改変には、読者層の少年少女に、Abel に象徴される米国が、かつてのような敵ではなく友であることを強調する意図が働いていたとも考えられる。このように、香山滋の『魔女の森』は、アメリカ人主人公の Abel が読者である少年少女の理想的なモデルとなるよう改変された翻訳であり、そこには戦後の翻訳児童文学が、アメリカを理想とする教育的役割を担っていたことが表れている。

3. 2　先住民の殺戮

「見る」という行為の受動性や好奇心の無邪気さというものは保持できないものだと Pratt (1992) は述べるが (67)、奥地への関心からこの地を訪れた Abel も、客観的な観察者に留まることはできない。Abel と先住民の接触は、かくして Abel による先住民の村の暴力的な破壊という結末を迎える。西洋人による暴力や破壊については、その直接的な描写は行われず、破壊が終わった後の情景や、逸話の形で語られると Pratt (1992) がいう通り (55)、*Green Mansions* において Abel が怒りに駆られ、先住民を殺害する場面も、その直接の描写はなく、殺戮の後の情景だけが描かれている：'It was the sight of an old woman, lying where she had been struck down, the fire of the blazing house lighting her wide-open glassy eyes and white hair dabbled in blood, which suddenly, as by a miracle, wrought this change in my brain.' (244)

老婆 Cla-cla の遺骸をこのように目にした Abel は、その自らの暴力に愕然とし、罪の意識に苛まれる日々を送る。旅行記の中で先住民への暴力や破壊の結果、西洋人が罪悪感や後悔の念を抱く様子が描かれるとき、「言説の秩序が崩れ」、その裂け目に「対抗言

説」が忍び込むと Pratt（1992）はいう（167）。すなわち、'contact zone' における先住民と西洋人との接触のなかで西洋人が支配者として奮う野蛮な暴力は、優れた人間性を持つ存在としての西洋人の自己規定を揺るがすものであり、その西洋人自身にも悔恨と深い心の傷をもたらすことになる。*Green Mansion* の Abel も、'What horrible thing, what calamity that frightened my soul to think of, had fallen on me?'（245）と嘆き悲しむが、そのような彼の前に現れる Rima の幻が告げる言葉（'That which you have done is done, and yours must be the penalty and the sorrow – yours and mine – yours and mine – yours and mine.' [262]）も、Abel 自身の罪の意識の投影であるに違いない。やがて彼は Rima の言葉通り、悲しみと罪の意識を抱えて町へと帰ってゆく。しかし、彼の冒険譚の聞き手である「私」が冒頭で眼にするように、一連の出来事が彼に与えた傷は癒えることはない。西洋人と先住民の二者が 'contact zone' で接触した結果、先住民の古来の社会が破壊されるのみならず、西洋人の内面にも、自己破壊的で不可逆的な変化がもたらされるのだ。

しかし、先住民に対する Abel の暴力は、『魔女の森』では先住民の無知に対する、やむをえない制裁という意味から正当化されている。原作で描かれた先住民と西洋人との相互作用的あるいは相互侵食的な関係が、翻訳では単純な善と悪との対立に還元されてしまっているといってもいいだろう。まず、Rima の死を知った際の、原作と翻訳の Abel の言葉を比べると、原作においては、Abel の怒りと悲しみは大自然とその創造主に向けられている：'Alas! this bright being, like no other in its divine brightness, so long in the making, now no more than a dead leaf, a little dust, lost and forgotten for ever – O pitiless! O cruel!' そして、'I knew it all before – this law of nature and of necessity, against which all revolt is idle...' と（240）、彼はそれが自然の摂理であることを認め、その理不尽さに悲しみと怒りをいっそう深める。しかし、この一節が、香山訳では次のように変えられている。「それにもまして、あのような、清純な、けがれを知らぬうつくしい心とからだの持主が、心なき土人の迷信と狂気のぎせいとなって、いっしゅんのまにほろび去ってしまうとは！おお無慈悲な！おお残酷な！」（264-265）すなわち、村人の迷信と狂気が Rima を死に至らしめたと断言する言葉に改変されている。

また、すでに見た通り、原作の Abel は殺戮の後、彼に親切だった老女 Cla-cla の死骸を目にして 'What horrible thing, what calamity that frightened my soul to think of, had fallen on me?' と罪の意識にかられるが（245）、香山訳ではこの一文が、「かんべんしてくれ、おばあさん！ぼくはなんていう恩知らずだ。だが、あんたひとりをたすけだすことはできなかった。これが悲しい荒野の掟だとあきらめて、やすらかに眠ってくれ！」という、弁解じみた言葉に書き換えられている（273）。このように、香山訳では悔恨の

思いがAbelを深く苦しめることはないのである。

原作と香山訳のこのような対照は、AbelのもとにRimaの幻が現れる場面を比較すると、より明らかになる。原作のRimaは、罪悪感に苦しむAbelに、その罪悪感と悲しみの共有を口にするが（'That which you have done is done, and yours must be the penalty and the sorrow- yours and mine- yours and mine- yours and mine.' [262]）、翻訳でAbelを苦しめるものは、Rimaを失った悲しみのみである。そして、その彼のもとに現れたRimaの幻は、次のように彼に告げる。「あなたが、これからの生涯をかけてなさろうとするりっぱなおしごとこそ、あなたとあたしのもの！あなたとあたしのもの！」(310) 原文の修辞的な形式は意識してはいるものの、その内容は「罰と悲しみ」から「りっぱなおしごと」へと転換されている。このようなRimaの言葉を受け、香山訳は、以下のようなAbelの言葉で締めくくられている。「ぼくはいま、ふたたび、元気で世界中の未開の蛮地探検をつづけています。ぼくが生涯をかけての、生きがいのあると信じた仕事—それこそは、未開野蛮の人たちの迷信をとりのぞき、二度とふたたび、『Rimaの悲劇』をくりかえさせることのないよう、遊説説得の冒険旅行をこころざしているのです」(312)。

このようにして『魔女の森』は、*Green Mansions*を、アメリカ人少年Abelが先住民の無知と狂気を正す勧善懲悪の物語へと単純化する。この改変も、『魔女の森』を含む翻訳児童文学が、戦後日本において、米国をモデルとする社会の構築を目指すための教育的役割を担っていたことの表れであろう。少年少女の理想的なモデルであるべきアメリカ人少年が、先住民に暴力を奮うことの整合性を保つため、『魔女の森』では、Abelの先住民殺戮が'contact zone'の当事者双方に変化をもたらす局面ではなく、ただ単に先住民の無知に起因する「悲劇」であり、それはAbelによる「遊説説得」すなわち教育により回避できると説明する改変が施されたと考えられる。

4 『密林に咲く花』と *Green Mansions*

最後に、香山滋と彼自身の作品にみられる*Green Mansions*の影響に着目する。香山滋は1947年4月、探偵小説雑誌『宝石』に小説を発表して作家活動を開始した人物である。彼は少年少女を対象とした冒険小説の書き手でもあり、1959年までに『探偵少年』、『少年』、『少年少女冒険王』などの雑誌に掲載された小説のほか、単行本を含め、97篇もの少年少女向け作品を発表している。『魔女の森』は香山が手掛けた唯一の翻訳だが、彼は*Green Mansions*に深い愛着を抱いていたようだ。香山は「私は常にHudsonの『緑の館』を座右から離したことがない。私は一生にただ一つでいい、こうした素晴らしい作品を遺して死にたい」とも述べている（1997 [1948]: 341）。

香山自身の作品のいくつかには、*Green Mansions* の影響が認められる。たとえば『タンガニーカの砦』は、日本人青年による有尾人の島への冒険物語だが、島の女王のリーマという名前や、彼女が文明人に住みかを追われたという設定は *Green Mansions* に類似している。日本人の探検隊が秘境の種族に遭遇する作品には他にも『Z9』があるが、これも文明人と隔絶して暮らす少女が登場する物語であり、やはり *Green Mansions* を想起させる。

そのなかでも、1952 年から雑誌に発表された『密林に咲く花』には、森に住む不思議な少女、彼女を魔女と信じ恐れる先住民、その森を訪ねる外部の人間が登場するなど、*Green Mansions* に類似した構図がみられる。Runi という先住民の名前や、少女がクモの糸で織った美しい光沢のある洋服を着ているという描写も、*Green Mansions* を思わせる。ただし『密林に咲く花』に登場する少女エミーが、大山猫に育てられた子供とされている点は、*Green Mansions* とは異なる。また、森を訪ねる探検隊は日本人であるが、これは読者の少年少女が親しみやすいよう考えられたものであろう。

『魔女の森』と『密林に咲く花』には、どちらにも、先住民と外部の探検隊との接触が描かれている。さきに述べたように『魔女の森』では、これが Abel による先住民殺戮という暴力的な結末を迎え、その原因は先住民の無知にあるとされていた。一方、『密林に咲く花』では、話し合いにより両者は和解する。大山猫のもとから、産みの親である牧師夫妻のもとへと少女エミーを連れ帰ろうとする探検隊は、Runi たち先住民に援助を求めるものの、エミーを魔女と信じ退治しようとする先住民に聞き入れられない。しかし、エミーが牧師の娘であることを知ると、Runi は自らの誤解を悔い謝罪し、探検隊もそれを許すのである。さらに、『密林に咲く花』の終盤、探検隊は自然のなかで育ったエミーをむりやりに文明社会へ連れ戻すことに懐疑的な態度を示し、少女エミーを森から強制的に連れ帰るのではなく、牧師夫妻が森に住むことで彼女とともに暮らすという解決策が採られる。このように、森の少女エミー、先住民、文明社会からの探検隊の三者の間に、和解と共存の道が示されるのである。

『密林に咲く花』は『魔女の森』とは異なり、香山滋の創作である。しかし、そのなかでの先住民と探検隊との関わりに着目すると、『密林に咲く花』は、*Green Mansions* に描かれたような 'contact zone' での二者の接触に対し、『魔女の森』とは異なる結末が導かれる可能性を提案しているとも考えられる。さきに述べたように、『密林に咲く花』では、探検隊と、少女エミー、先住民との間に、誰も傷を負うことのない平和的な共存が図られていた。すなわち、『密林に咲く花』は、香山滋が *Green Mansions* の提示する 'contact zone' における他者との暴力的な衝突の問題を、『魔女の森』の改変にみられるような善悪の対立として、一面的にのみ捉えていたわけではないことを示唆していると考えられる。

5　おわりに

翻訳は、同時代の政治的、社会的配慮のもとで行われる。本論文で述べたように、第二次世界大戦後の日本における翻訳児童文学と、それに続く国内の児童文学は、アメリカを理想とする戦後社会の構築のための教育的役割を担っていた。その流れを汲む香山滋の翻訳『魔女の森』では、原作 *Green Mansions* における Abel と先住民との 'contact zone' での接触の様相に、二つの特徴的な改変がみられた。一つは、Abel の人物像が、奥地の経験で心に傷を受けたヴェネズエラ人青年ではなく、無知な先住民を教え導く理想的なアメリカ人少年に改変されたことである。これにともない、Abel による先住民への侮蔑的な描写も削除されていた。二つ目は、Abel による先住民殺戮の場面の改変である。原作では Abel と先住民の接触が、双方を暴力的に変化させる様相が描かれていたが、『魔女の森』では、Abel の暴力は先住民への然るべき制裁として正当化され、物語はアメリカ人少年 Abel の勧善懲悪の物語へと単純化された。この改変は、かつて敵対していた米国を理想的なモデルとし、社会の転換を測る当時の戦後日本において、異質なものとの接触が生み出す摩擦の可能性は、読者から隠蔽する必要性があったためとも考えられるだろう。このことも、『魔女の森』を含む戦後の翻訳児童文学が、米国主導の民主化を円滑に進めるための教育的役割を担っていたことの表れであると考えられる。

さらに、本論文では、香山滋自身の作品にみられる *Green Mansions* の影響について論じた。『魔女の森』では、上に述べたような改変を施す一方で、香山滋は *Green Mansions* の提示する 'contact zone' での二者の衝突に対し、別の解決策が導かれる可能性も考えていたようだ。それは彼自身の作品『密林に咲く花』にみられる平和的な話し合いであり、これにより和解と共存の道が拓かれる。香山作品にみられるこのような結末の選択は、*Green Mansions* で描かれた 'contact zone' での暴力的な衝突が、『魔女の森』において善悪の対立に単純化されたことは、香山個人が希望した改変というより、戦後日本の社会的要請によるものが大きかったことを裏付けると考えられるのではないだろうか。この点に関しては、香山が『魔女の森』を書くに至った経緯、このような翻案を書くことに対する香山自身の見解、また、香山が原作の *Green Mansions* をどのように解釈していたのかを、さらに調査し検証する必要があるが、これは今後の課題としたい。

参考文献

一次資料

Hudson, William Henry. *Green Mansions*. New York: Overlook Duckworth. 2007 [1904].

香山滋『魔女の森』、偕成社、1954。

———「Z9」『香山滋全集』第 12 巻、三一書房、1994[1950]、pp.117-222。
———「密林に咲く花」『香山滋全集』第 12 巻、三一書房、1994[1952]、pp.223-265。
———「タンガニーカの砦」『香山滋全集』第 13 巻、三一書房、1994[1950]、pp.117-208。
———「私の探偵小説への関心」『香山滋全集』別巻、三一書房、1997[1948]、pp.340-342。
連合国最高司令官総司令部『GHQ 日本占領史』第 17 巻、古川純・岡本篤尚（訳）、日本図書センター、1999。(GHQ/SCAP. *History of the Non-military Activities of the Occupation of Japan, 1945-51.* 1951.)
「出版年鑑」『出版年鑑：昭和 19, 20, 21 年度版』、日本出版協同（編）、文泉堂出版、1978[1946]。
『日本読書新聞』日本出版協会、1947 年 10 月 1 日。
———日本出版協会、1947 年 10 月 8 日。
———日本出版協会、1948 年 5 月 26 日。

二次資料

Baker, Mona. *Translation and Conflict.* London: Routledge, 2006.
Bassnett, Susan. *Translation Studies.* 3rd ed. Oxson: Routledge, 2002.
Fitzpatrick, Elizabeth. "Balai Pustaka in the Dutch East Indies: Colonizing a Literature." *Changing the Terms.* Ed. Sherry Simon & Paul St-Pierre. Ottawa: University of Ottawa Press, 2000. 113-126.
Lefevere, André, and Susan Bassnett. "Proust's Grandmother and the Thousand and One Nights." *Translaion, History and Culture.* Ed. Susan Bassnett & André Lefevere. London: Pinter, 1990. 1-13.
Pratt, Mary L. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation.* New York: Routledge, 1992.
Puurtinen, Tiina. "Dynamic Style as a Parameter of Acceptability in Translated Children's Books." *Translation Studies: An Interdiscipline.* Ed. Mary Snell-Hornby, Franz Pöchhacker, & Klaus Kaindl. Vol. 2. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 1994. 27-36.
Tomalin, Ruth. *W.H. Hudson: A Bibliography.* Oxford: Oxford University Press, 1984.
Toury, Gideon. *Descriptive Translation Studies and Beyond.* Amsterdam: John Benjamins, 1995.

Venuti, Lawrence. *The Scandals of Translation*. London: Routledge, 1998.

大藤幹夫「創刊号から見た戦後初期の児童雑誌」『日本文学研究資料叢書』第77巻、日本文学研究資料刊行会（編）、有精堂出版、1977[1975]、pp.279-288。

寒河道夫「子供と文学」『現代児童文学論集』第2巻、日本児童文学者協会（編）、日本図書センター、2007[1953]、pp.173-204。

瀬名尭彦「解題」『香山滋全集』別巻、三一書房、1997、pp.569-582。

歳岡冴香「*The Yearling* 邦訳－大久保康雄訳『一歳仔』と『イヤリング』」『言語文化共同研究プロジェクト2009 レトリックの文化と歴史性』、大阪大学大学院言語文化研究科、2010、pp.57-66。

宮田昇『翻訳権の戦後史』、みすず書房、1999。